

短 報

## 社会福祉実習が学生に与える効果についての研究(2)

田淵 創\* 竹内一夫 田口豊郁 真野元四郎

川崎医療福祉大学 医療福祉学部 医療福祉学科

(平成10年 5 月20日受理)

### A Study of the Effect on Students of Field Work in Social Work Education (2)

**Hajime TABUCHI, Kazuo TAKEUCHI, Toyohiro TAGUCHI  
and Motoshiro MANO**

*Department of Medical Social Work  
Faculty of Medical Welfare  
Kawasaki University of Medical Welfare  
Kurashiki, 701-0193, Japan  
(Accepted May 20, 1998)*

**Key words :** field work in social work education,  
internal change (self awareness), assertive checklist

#### はじめに

われわれは前研究において<sup>1)</sup>,実際に実習することによって,福祉を学ぶ学生の間にも多くみられた施設(特別養護老人ホーム)に対するマイナスのイメージがある程度払拭され,偏見の解消,客観的態度の形成がなされ,専門家としての態度が育ちつつあるという効果がもたらされることを指摘した。

今回は,アサーション調査を使用して,実習前と後の自己の内的変化について検討してみたいと思う。アサーション(assertion)とは一般

に主張とか断言と訳されているが,それは単に自己主張するだけでなく,自分の行動に自信と責任をもち,相手と問題を生じないようにうまく振る舞うという意味を含んだものであり,あえて日本語に置き換えるなら「相互尊重の自己表現」と訳するのがふさわしいといわれている。<sup>2)</sup>

実習において,利用者のことを優先するあまり,自己を主張できない学生がいる。相手の気持ちを大切にしやすい学生かも知れないが,自分に不正直であるためストレスをため込むことになり,対人関係は表層的で希薄になりやすい。それに対して,自分も相手も大切にするア

\* 現住所 平安女学院短期大学キリスト教科

Present address : Heian Jogakuin St. Agnes' School Department of Christian Studies  
Takatsuki, 569-1092, Japan

サーティブな学生は、相手との葛藤を含みながらも、もめごとを避けずにお互いが歩み寄り、その結果と自分に責任をとる態度をもつことになる。そこにこそ相互尊重の人間関係が生まれ、実習の成果として期待される自己の内的変化が得られると思われる。

### 調査の方法と対象

調査対象者は川崎医療福祉大学医療福祉学部医療福祉学科4期生（平成10年3月卒）で、平成9年に社会福祉援助技術現場実習を行った学生124名（男性40人、女性84人）である。

1回目のアサーティブ調査を、平成9年1月、彼らが3回生の時に行われていた学内実習の授業中に3回生全員に対して行った

そして、同じく全員に対して2回目の調査を実習Ⅱ（配属実習）の終了した後の、実習Ⅲ（事後学習）の最初の授業で行った。配属実習の多くは3回生の春季休業中に行われるが、一部は4回生になってから行われるものもある。したがって2回目の調査は平成9年4月から同年10月までの間に行われた。今回の分析は1回目の調査と2回目の調査との間を統一するために、平成9年4月に2回目の調査をし、1回目と2回目のマッチングができた学生を対象とした。

アサーティブ・チェックリストは全30項目からなり、それぞれの項目を「まったくそうでない」「ありそうでない」「ややそうである」「かなりそうである」の4段階で評定する。そして、その結果をそれぞれ5項目からなる次の6つの下位尺度に分類し、個人のアサーションの質を分析する。

①正当な権利の主張 自分が幸せになるために必要な権利を遠慮なく主張できる人

②自己信頼 人生その時々を楽しく過ごそうとする自己肯定的な人

③自己開示 ざっくばらんな人柄で、ホンネの話ができる人

④受容性 不満を抱えて自己嫌悪に陥ることなく、前向きな生き方のできる人

⑤断る力 他者の責任まで引き受けてしまうイエスマンになることなく、独立独歩のスタンスの持ち主

⑥対決 対立場面でも喧嘩の構造に巻き込まれることなく、さわやかに自分の感情表現ができる人

### 調査結果

1回目（実習前）と2回目（実習後）のアサーティブ得点は表1のようになった。

表1 アサーティブ・チェックリストによる得点（各20点満点）

	1回目 (実習前)	2回目 (実習後)	t 値	危険率
正当な権利の主張	13.82	14.53	3.47	0.0007
自己信頼	12.38	13.31	4.97	0.0000
自己開示	15.24	15.66	1.99	0.0486
受容性	14.83	15.38	2.89	0.0045
断る力	13.00	13.94	4.11	0.0001
対決	13.15	13.68	2.41	0.0174

表1の結果、いずれの項目の得点も有意に上昇し、実習を経験することにより、よりアサーティブな態度が形成され、学生たちは自己を表現するとともに相手の権利も尊重するといった相互尊重の人間関係を経験してきたのではないかと推測される。特に、1回目の調査で得点の低かった、自己信頼や断る力の得点の上昇が大きく、実習を終えたことによって自己に対する信頼、自信のようなものがめばえ、受け身的な存在から自主的に積極的にかかわっていかうとする姿勢をみることができる。

男女別に細かくみていくと、男女の間に有意差のあった項目は、1回目（実習前）の対決（男 13.85 女 12.81  $t=2.06$   $p=0.0411$ ）と2回目（実習後）の自己開示（男 15.00 女 15.98  $t=2.22$   $p=0.0286$ ）の2項目だけであった。1回目はこの対決を含め、その他の項目は有意差こそなかったものの、断る力をのぞいて男性の得点が女性の得点を上回っていたものが、2回目は有意差のあった自己開示を含め4項目（正当な権利の主張、断る力、対決）において女性の得点が高くなっていた。したがって、実習を経験することによって起こる、自己の内的変化には男女による差違がみられることが推

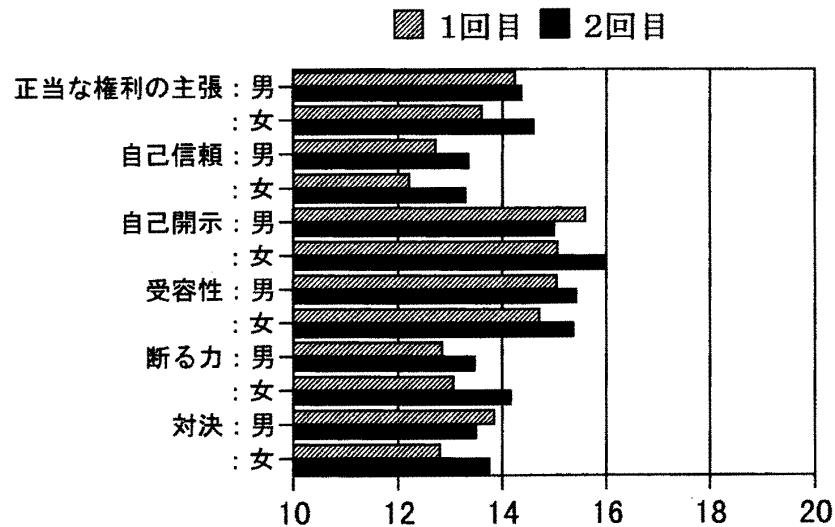


図1 1回目と2回目のアサーション得点の比較

測された。そこで、男女別に1回目と2回目の得点を比較したものが図1である。

その結果、なんと男性ではすべての項目で有意な差がなく(自己信頼のみは $5\%$ 水準  $t=2.02$   $p=0.0503$  で傾向がみられたが)、自己開示と対決の項目の得点はむしろ下降していた。それに対し女性では全ての項目で1点前後得点が上昇していた。いずれも有意な差であり、その危険率も1項目を除いて(受容性  $p=0.0081$ )、 $0.1\%$ 以下という大きな差であった。したがって、実習による自己の内的変化は女子学生にとって大きく、男子学生ではあまり変化が起こっていないといってもいいであろう。

また、1回目の得点と2回目の得点を個人別に対応させ、その変化をみたものが表2である。

当然のことながら、上記の結果と同じ傾向で、女性では半数前後の学生の得点が上昇しているのに対し、男性では自己信頼と断る力のみが半数を超えただけで、自己開示や対決では逆に半数近くがその得点を下げている。6項目の得点合計では約3割(37人:29.8% 男性18人:45% 女性19人:22.6%)の人がその得点を下げている。どうして、多くの人がアサーティブに移行している中で、得点が下がったのであろうか。特に得点の下がった(=6点以上)12人を抽出し、その性別(男6人:女6人)、実習先(特別

養護老人ホーム7人:精神薄弱者更生施設4人:重度身体障害者更生援護施設1人)、アンケートの回答内容等で分析を試みたが、はっきりとした結論を導き出せなかった。ただ、1回目の得点と得点差の相関係数を求めてみると、どの項目も $-0.408 \sim -0.505$ とかなりの負の相関をしめしていた。すなわち、1回目の得点の低い学生は2回目は上昇することが多く、逆に1回目得点の高かった学生は2回目には少し下降している。そのような点からこの12名をみると、彼らのアサーション得点は6項目すべてにおいて

表2 1回目(実習前)と2回目(実習後)の得点の変化

		単位 人数(%)		
		上 昇	同 じ	下 降
正 当 な 権 利 の 主 張	男	14 (35.0)	11 (27.5)	15 (37.5)
	女	48 (57.1)	18 (21.4)	18 (21.4)
自 己 信 頼	男	24 (60.0)	5 (12.5)	11 (27.5)
	女	49 (58.3)	21 (25.0)	14 (16.7)
自 己 開 示	男	13 (32.5)	7 (17.5)	20 (50.0)
	女	41 (48.8)	21 (25.0)	22 (26.2)
受 容 性	男	18 (45.0)	9 (22.5)	13 (32.5)
	女	42 (50.0)	16 (19.0)	26 (31.0)
断 る 力	男	20 (50.0)	6 (15.0)	14 (35.0)
	女	46 (54.8)	17 (20.2)	21 (25.0)
対 決	男	14 (35.0)	7 (17.5)	19 (47.5)
	女	46 (54.8)	15 (17.9)	23 (27.4)

て平均点より得点が高く、内4項目（正当な権利の主張、自己信頼、自己開示、対決）には有意な差がみられた。またこの内3人が「実習で自分を客観的に見ることができた」とアンケートにおいて自己分析していることと考えあわせれば、実習はもう一度自己を客観視し、見直す

という機会にもなっていると考えられるのではないだろうか。

謝辞：本研究は平成6年度川崎医療福祉大学プロジェクト研究費によったことを付して感謝する。

## 文 献

- 1) 田淵 創, 竹内一夫, 田口豊郁, 真野元四郎 (1997) 社会福祉実習が学生に与える効果についての研究 (1). 川崎医療福祉学会誌, 7(2), 369—372.
- 2) 川瀬正裕, 松本真理子 (1996) 自分さがしの心理学. ナカニシヤ出版, 京都, pp 68—76.
- 3) 牧野田恵美子, 丹野真紀子 (1996) 学生の社会福祉現場実習における成果と福祉現場に対する意識について. 日本福祉学会第44回大会研究報告概要集, 614—615.